



## ウメノキゴケ

(*Parmotrema tinctorum*)

文  
写真 松本達雄 (理学研究科生物科学専攻博士課程後期3年)  
Matsumoto, Tatsuhiro



図1 アカマツに着生しているウメノキゴケ



図2 アベマキに着生しているウメノキゴケ



図4 サツキに着生していたナミガタウメノキゴケ



図3 ウメノキゴケの断面(緑色の部分が藻類)

東広島キャンパス内には、アカマツ林をはじめ自然状態の林が多く見られます。それら木々の樹皮には、時折、灰緑色をしたウメノキゴケの着生が見られます。「ゴケ」と名前がついていますが、いわゆるゴケ植物(蘚苔類)ではなく、地衣類と呼ばれるものです。地衣類は菌類と藻類の二種類の生物から構成されているが、見た目は一つの生物に見える非常に変わった生物です。

菌類は藻類のためにすみかを与え、藻体から水分が蒸発するのを防ぎます。藻類は菌類に光合成で作った炭水化物を栄養として与えています。このように複数の種類の生物が、互いに利益を与えて緊密な関係を保っていることを「共生」と呼びますが、地衣類はまさに共生が作りだした生物なのです。

ウメノキゴケを漢字で書くと「梅の樹苔」となり、ウメ、サクラ、アカマツなどの樹皮によく着生することからそのように名づけられています。最近その姿を見かけることが少なくなってきましたが、西日本ではごくありふれた地衣類であり、まだ東広島キャンパス周辺にはアカマツなどの樹皮や石垣などに着生しているのがよく見られます。

ところでこのウメノキゴケは、我々のまったく予想もしないところで利用されています。日本のお正月には、玄関先に門松を飾る風習があります。この門松には松の木が使われていますが、たいていの場合、その松の樹皮にはウメノキゴケが着生しています。ウメノキゴケのついた松を切って門松にする場合もあるでしょうが、後でウメノキゴケを接着剤で松につけておくことが多いそうです。

なぜ門松にはウメノキゴケが着生した松を使うのでしょうか。いろいろと調べてみましたが、その理由は分かりませんでした。

そこで、次のような仮説を立ててみました。一般に地衣類は大気汚染に弱く、環境指標として用いられることもあります。昔はほとんど大気汚染がひどくなかったため、松の木にはかなりの割合でウメノキゴケが着生していたと考えられます。そのため、ウメノキゴケの着生した松を門松に用いるのが当然のようになり、ウメノキゴケが少なくなった現在でも、それをわざわざ松につけるようになったのではないのでしょうか。東広島キャンパス周辺では、ウメノキゴケがまだよく見られるため、関西方面の門松をつくる業者がわざわざ取りにきているようです。

地衣類は樹皮や岩石にびったりと着生しているため、たいていの場合着生している基物と運命を共にします。

先日キャンパス内を散策していたら、サツキの植え込みの枝先に着生しているナミガタウメノキゴケを発見しました。ナミガタウメノキゴケはウメノキゴケによく似ていますが、日本中のどこにもある地衣類というわけではなく、どちらかというところ珍しい地衣類です。最初からキャンパス周辺にあったのではなく、この地衣類が着生していたサツキと一緒に東広島キャンパスにやって来たのではないのでしょうか。おそらくナミガタウメノキゴケだけでなく、本当は西条周辺では見られるはずのない地衣類も、街路樹や植え込みの植物と一緒にキャンパスに運ばれて来ているのではないかと考えられます。

皆さんも樹皮や石垣などを注意深く眺めてみてください。きっと今まで気づかなかった生物を発見することができるでしょう。